

玄界沿岸における陶磁器片の漂着 特に中国竜泉窯“三槐”の印文について

石井 忠¹

Broken pieces of pottery stranded on the coast of Genkai, Fukuoka Prefecture,
with special reference to the stamp of “Sankai”, Longquan Kilms in China

Tadashi ISHII¹

要 約

玄界灘沿岸で、陶磁器片の漂着地が17カ所あることを確認している。そのうちの9カ所を選んで漂着地の概要を述べ、陶磁器片漂着の原因、および花見浜に漂着した青磁片“三槐”の印文について考えてみた。

Key Words: Genkai, Fukuoka, pottery, Sankai, stamp

はじめに

漂着物は、浮いて流れてくるものだけでなく、海底に沈んでいたものが、波の作用で揺り上げられるものや、陸上のものが河川から流出して海へ出て再び寄せられるものもある。

浮くものは海流や潮流によって運ばれ、遠くは何千kmを漂流してくる。それに対して沈むものは、陸上から河川を通じて運ばれてきたり、沈没船からの揺り上げや、海岸浸食などによって海岸に寄せられるため、その起源は比較的近距离が想定される(石井 1999)。この沈むものの中でも陶磁器片(図1)は、福岡県遠賀郡芦屋浜から福岡市西区今津浜までの約60kmの海岸17カ所(石井 1997)で漂着が確認されている。本報告では、そのうち漂着量が多い9カ所を選んで、漂着地の概要について報告する。またこれまで近世陶磁器片は、かなりの量が漂着、採集されているが、中世輸入陶磁器についての報告は少ない。特に当地で採集された印文をもった三槐の青磁片は、初見の可能性がありここではこれについて詳しく述べることにする。

陶磁器片漂着地の概要

遠賀郡芦屋町芦屋浜(漂着地図番号1): 1978年に約7,000枚(日本銭, 渡来銭)が漂着した。その中には中国の古銭半両(泰・漢)もあった。他に祭祀用儀鏡, 刀鏝, 煙管の雁首等の金属製品も含まれた。渡来銭は宋・元・明・清銭と、各時代にわたっていた。ここで採集されたものは、芦屋町立歴史民俗資料館に保存され、一部が展示されている。その後芦屋浜には1979年に大量の肥前陶磁器片が漂着している。

岡垣町岡垣浜(漂着地図番号2): 遠賀郡芦屋町と岡垣町の境に矢矧川が流れる。矢矧川から岡垣町の汐入川の間, 約3kmは自然海岸がつづいている。1949年から米軍, 自衛隊の射撃場であったが, 1972年に返還された。返還前から矢矧川河口付近に砂採取場があつて, 砂を篩にかけて固形物(貝殻や石, 陶磁器片)を選別し, それを採取場の隅に積んだり, 一部は道路の端に撒かれていた。その中には肥前系陶磁器片が多く混じり, 一部で話題となっていた。この海岸で地元の添田征止により土器, 須恵器から中近世陶磁器片まで, 膨大な量の陶磁器片が採集されている。なかでもクラワンカ手と称されるものの割合が高い。また完形品も含んでいることから, 沖に

¹ 〒811-3103 福岡県古賀市中央2丁目13番1号 古賀市歴史資料館

¹ Koga City Historical Data Hall, 2-13-1, Chuou Koga City, Fukuoka 811-3101, Japan

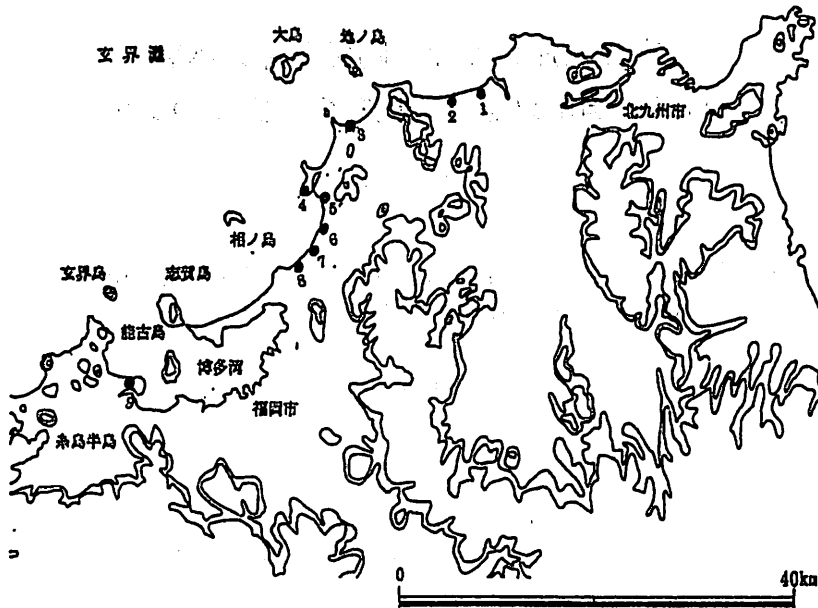


図1. 漂着陶磁片採集地

沈没船がある可能性も考えられる。

宗像市(旧玄海町)江口浜(漂着地図番号3):宗像市第一の釣川は全長約15kmの河川である。河口に近い福岡県立少年自然の家の浜には肥前系陶磁器片が多く漂着していたが、沖に消波ブロックを投入して横堤を作ったため流れが変化し漂着は著しく減少した。近くに釣川の旧河口がある。コメダシの地名が残り、江戸時代こより米の積み出しが行われていた。

福津市(旧津屋崎町)曾根鼻(漂着地図番号4):曾根鼻と北九州津屋崎病院の間は、干潮時になると海に突き出るように、長い磯質海岸が現れる。この海岸一帯で中西弘が肥前系陶磁器片を多数採集している。採集品の大半は福津市(旧津屋崎町教育委員会)に寄贈された。江戸後期頃のものである。津屋崎は津屋崎千軒と呼ばれ、米の積み出し港としても栄えた所である(津屋崎町史編さん委員会 1999)。

福津市(旧津屋崎町)津屋崎浜(漂着地図番号5):福岡県立水産高等学校東側は大潮時に砂州が現れ、そこより原田誠が中世の瓦器、土器、陶器、漁業用の土鍾等を、採集している。

海岸より約600m北側に津屋崎小学校があり、改修工事の際、中世の遺構と共に大量の中国青磁類が発掘された(津屋崎町教育委員会 2004)、現在校舎内に「在自唐坊跡展示館」がつくられ保存整備されている。この付近は唐坊の地名が残っている。唐坊と

は「唐人の居住する地」という意(中世都市研究会 2004)である。海外貿易の中心であった博多には大唐街がつくられたが、それを証するように、地下鉄工事の際には居住地から大量の白磁、青磁等の陶磁器が出土した。それら陶磁器の高台には、正・陳・李・長・丁の名や綱(組)を墨書したものが多く発掘されている(福岡市教育委員会 1997)。在自唐坊跡からも青磁碗の高台に「綱」の墨書文字1点が発掘されている。玄界灘に面した潟港では12, 3世紀にかけて宋人たちの活動交流が盛んであったことが推察されている。

福津市(旧津屋崎町)今川浜(漂着地図番号6):手光今川河口から約300m上流に今川遺跡(津屋崎町教育委員会 1981)がある。今川は河幅が狭く、下流域は蛇行し浸食が著しい。砂丘下には縄文時代晩期から弥生時代初期の遺跡を包含していた。その蛇行の浸食を受けて遺物が海へ流出し、河口から200~300mの波打ち際に夥しい土器片が散布していたのが、遺跡発見の端緒である。1979年の調査で縄文晩期から弥生初期を中心とした遺跡があらわれ、発掘された。銅鏃や銅鏝は朝鮮半島北部の遼寧式銅劍を再加工したものであった。また装飾品の勾玉や小玉の石質は天河石(アマゾナイト)であり、朝鮮半島に産することから、渡来人の居住地だった可能性が高いとされた遺跡である。

福津市(旧福岡町)花見浜(漂着地図番号7):福津

市花見浜には福津市と古賀市の境を流れる刈目川（行政区上は河口部が福津市，中・上流域が古賀市）がある。全長1.5kmの小河川で、現在は公共下水道雨水幹線という名称となり、下流域は三面ぼり、中・上流域は蓋をして暗渠となっている。中世の中国竜泉窯の陶磁器片のうちの4点は見込みに印文があり、そのうちの1点は我が国では初見ではないかと思われる「三槐」の印文が刻まれている。

新宮町新宮浜（漂着地図番号8）：玄界沿岸一帯は1980年代に海岸浸食を受け、砂浜が減少したり護岸の崩落が起こったため、その対応として防潮堤をつくり、浸食を防ぐ工事がすすめられた。新宮浜でも沖に横堤7本を造って浸食を防いでいたが、逆に潮流が変化し、砂が根付いたり半面減少した所も出てきた。砂の減少で砂利浜となったため、そこから中世の陶磁器片がみられた。

福岡市今津浜（漂着地図番号9）：今津は、中世博多津に対して新しい津の意味で今津と呼ばれた。ここは中世仏教との関係が深いところである。栄西は12世紀後半に今津誓願寺に逗留していたし、また近くの勝福寺は1249年大覚禪師（蘭溪道隆）の開基である。その勝福寺の西砂丘の造成地から約200基の中世墓が見つかり、多数の青磁碗の副葬がみられた（川添 1989）。今津浜では平井征南が多くの中世陶磁器片を採集している。ここも海岸線沿いに護岸がつから、現在は新たな陶磁器片の漂着はない。

まとめと考察

陶磁器片漂着の原因

海岸に漂着する陶磁器片の発生原因については、次のようなことが想定でき、いくつかの組み合わせも考えられる。

A 海岸沿いの遺跡や河川周辺遺跡からの流出

芦屋、岡垣、津屋崎、江口、今川、新宮、今津浜で採集された陶磁器片は河口付近から中・上流域にあった中近世遺跡が後の諸工事による破壊や洪水等によって河口まで運ばれてきたものであろう。芦屋の古銭の漂着は、各時代にわたっているため沈没船からの流出とは考え難く、遠賀川や支流を通じて流出した金属類が纏まり、護岸工事で地形や潮流が変わって一箇所に漂着したものと推定される。

B 過去の船荷破損品の海中投棄による流出

芦屋は『筑前国統風土記』（貝原 1703）で「此海を芦屋洋として船客の甚おそる所也」と紹介された難所であり、伊万里から運ばれて来る途中の玄界灘

で破損したものを芦屋で整理し、破損品は沖で投入したとされている。沈没船からの流出の可能性も否定できない。同じことは曾根鼻でも考えられる。

C 海岸ないし島嶼の水没による流出

地震による島の水没は玄界では確認されていない。津屋崎浜のものは、海岸浸食による水没であろう。

D 沈没船からの流出

海難事故による沈没からの陶磁器類の流出は世界各地で多い。芦屋、岡垣にその可能性がある。玄界灘は古来から海難事故も多い。岡垣浜では完形品が400点以上漂着している。なお長崎県・鷹島周辺の海中から引き上げられたり、漂着した大量の陶磁器片類は、1284年（弘安4年）の元寇の際、この周辺で覆没した元船から流出したものである（石井 2005）。

竜泉窯の印文

花見浜で採集した中国青磁類は20数片あり、中国竜泉窯系（浙江省竜泉県）と同安窯系（福建省）のものが含まれ、表面が摩耗しているものと割れ口の新しいものがある。青磁の4点（図2）の印文について検討する。

金玉満堂の印文をもつ碗片：碗高台の部分（図2右下）で長径7cm、短径6.5cmの竜泉窯系青磁で13世紀代である。見込みに3.2cm×3.5cmの四角形の中に「金玉満堂」の陰刻をもつ。文字は肉太で、「満」がわずかに「+」を残して磨れているが、全体の文字から「満」と推察できる。胎土は緻密で釉は微かに隅に残っているだけである。長期間風雨に晒されていたものであろう。金玉満堂の文字は、金玉の宝物が家



図2. 印文をもつ青磁 右下金玉満堂



図3. 三槐の印文をもつ青磁片

に満ちている、才学が人に勝れている喩がある（諸橋 1967）。要するに吉祥句である。金玉満堂の印文は各地の中世遺跡から発掘されている。

三槐の印文をもつ碗片（図3）：初見とされる。竜泉窯系青磁で、碗の高台の部分である。残存径は7cm、短径6.8cmで、高2.2cm、見込みの部分全面に釉が残り、隅に花文らしい先端が僅かに見られる。高台の置付の周りは割れて磨れている。外体部高台脇に一線がめぐり、釉が残っている。見込みの部分に楕円状の二重丸（2.5cm）の中に、「二槐」の文字が陽刻されている。「二」との間に薄く「一」が見えるような気がするが、写真や拓本では判然としない。「一」が薄くそれに施釉したため「一」が出なかったのであろうか。諸橋（1967）では「二槐」はないので、「三槐」と判断した。「三槐」とは周代の外朝に植えた三本の槐の木で、「槐」は「懷」と音通、人をここに懐け来すの意であり、三公が之に向かって座したことから転じて「三公」をいう。「三公」とは古代中国において天子を補佐する最高位の官名で、周代を例にとれば、太師・太傅・太保の三者がそれぞれであるが、これも「高位高官」の意で、「金玉満堂」と同様に吉祥句である。高位高官も金玉満堂も、共に人々の願望するところのものであろう。

ここにある槐（*Sophora Japonica* L.）はマメ科の植物で、原産地は中国である。樹高10~25mになる落葉高木、中国では尊貴の樹とされる。並木として植えられることも多く、北京の天壇の老大な槐並木が知られる。福岡県糟屋郡宇美町宇美八幡宮の「子安の木」もこの槐で（図5）、神功皇后伝説にからむものである（上原 1959）。森本朝子によればこの三槐銘の碗片は竜泉窯青磁碗で、14世紀明代頃のものという。図4は竜泉窯青磁碗片で底部高台の摩耗が

著しい。残存径7cm×6cm。釉はほとんどが磨れてなくなり、高台に残存している。見込み中央部に木偏の文字が陽刻されているのが微かに見える。「槐」とすれば「鬼」の部分が破損、摩耗している。槐が尊貴の樹であるところから「槐」の可能性は捨てきれない。

図2の左下の破片は、高台がやや小振りで長径6cm、短径5cm、白っぽい青磁である。見込みの部分に縦1.6cm、横1cm、の四角形の陰刻が残っているが、中の文字は摩耗して見えない。高台の部分は5.2cm、2004年7月古賀市・田淵遺跡から発掘された陶磁器片類を洗浄中、これと同形の竜泉窯系青磁器片が見つかった。こちらは見込みの四角形印の中に「吉」の文字がある。また、福岡市・博多遺跡群（福岡市教育委員会 1997）から出土した竜泉窯系青磁碗には、印花文に「吉」の文字をもつものがある。

ここで述べた竜泉窯系青磁は、その始まりは北宋の中期で、それより早期に近い（11世紀）頃とし、さらに発展段階を、北宋（12世紀）、南宋（13世



図4. 木が残る青磁片



図5. 宇美八幡宮の槐

紀)、元・明(13~17世紀)、清(17世紀)の四つの時代に区分している。明代頃から衰退し、清の康熙時代(17~18世紀)までつづくが、以降は廃れていった。(貿易陶磁器研究界 1982)。輸出された竜泉窯系青磁の多くは南宋代の製品であるが、宋代は造船・航海術も発展し旧世界への広がりも背景にあった。日本への輸出航路は、寧波・杭州から海船に乗り東シナ海を東進到着した。

わが国には、宋・明・元代貿易により膨大な量の青磁・白磁器が国内に流入し、同時に中国人の往来や定住により博多大唐街や各地に唐坊が形成されている。日本各地で12世紀から14世紀にかけての青磁や白磁が出土することは、かなり幅広い階層まで需要があったと思われる。青磁や白磁の、土器や陶器に見られぬ硬さや薄さ、釉のなめらかな感触とが、人々を魅了してやまなかつたらしく、中世の土塚墓や木棺墓の副葬品として、墓地や遺跡から多く出土する。

金玉満堂の印文の出土例が多いのは、富への人々の願望が四文字の中に凝縮され、直接的で分かり易くもあって受容されたためであろうか。三槐は日本人にあっては役人以外の人たちに縁遠く、馴染みも薄く、その意味も難しいことから、輸入量も多くなかったのではないだろうか。

漂着陶磁器片には、表面採集という側面から資料性が低く、場所の特定も難しく、軽視されがちであるが、考古学や文献史学を併せて考えていくと、そのもたらされてきた本来の姿も見えてくるのではあるまいか。玄界に漂着した三槐の印文も輸入陶磁の一面を語っているようである。

謝 辞：この稿をまとめるにあたり、陶磁器研究家森本朝子、元九州歴史資料館横田義章、古代史研究家荒金卓也、古賀市教育委員会甲斐孝司の各氏に感謝申しあげる。

引用文献

- 貿易陶磁器研究会編。1982。貿易陶磁研究 2 (6) : 27-36。福岡市教育委員会編。1997。博多60。第1次、4次、8次調査報告書 6~10。
石井 忠。1997。玄界沿岸における陶磁片の漂着。九州沖縄水中考古学協会会報12 : 2-6。
石井 忠。1999。新編漂着物辞典。380pp。海鳥社、福岡。
石井 忠。2005。蒙古襲来絵詞の“てつはう”。漂着物学会誌 3 : 50-53。
貝原益軒。1703。筑前国続風土記。福岡県史続第4輯地

- 誌編。297pp。福岡県。
川添昭二。1989。よみがえる中世。205pp。平凡社、東京。
諸橋敏次。1967。大漢和辞典。1082pp。大修館書店、東京。
津屋崎町史編集委員会。1999。津屋崎町史(通史編)。1096pp。津屋崎町、福岡。
津屋崎町教育委員会編。1981。今川遺跡。50pp。津屋崎町、福岡。
津屋崎町教育委員会編。2004。在自西ノ後遺跡II。41pp。津屋崎町、福岡。
中世都市研究会編。2004。港湾都市と対外交渉。332pp。新人物往来社、東京。
上原敬二。1959。樹木大図説II。1203pp。有明書房、東京。

(Received July 25, 2006; accepted Oct. 10, 2006)